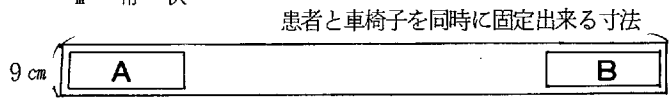
Ⅲ　帯　状



車椅子での坐位保持に独持の支持法が必要な男子に使用、ベルト巾は9㎝とし、長さは患者の要楽な姿勢で定める。同ベルトの使用は車椅子以外に、観劇、その他臨機応度に使用している。

アンケート調査並びに考察

安全ベルト試着後一ケ月目に患者、家族、職員を対象に、安全ベルトの安全性、機能性、操作性、院内外の必要性についてアンケート調査を行った。結果比較的好評を得たが、まだ次のような問題点が残されており更に改良を重ねて行く必要を感じた。

問　題　点

1）Ⅰの場合　車椅子の折たたみに邪魔にならないよう取り付け位置に注意する。

2）Ⅰの場合　車椅子からの取りはずしが困難である。

3）白地の布を使用した為汚れが目立つ。

4）マジックテープの持久力の追跡調査。

5）変形強度な患者の安全ベルトの工夫。

＜結　　果＞

安全ベルトは、多くの問題点を残しながらも、患者の危険防止に努めると共に、*ADL*の拡大、心理面に及ぼす好影響をみることが出来た。又介助者の精神的、肉体的負担の軽減にも微力ながら役立つ事が出来た。

7) ＰＭＤ症合併症予防に関する研究

国立療養所宇多野病院
渡　辺　和　代　　浅　原　昭　子
布　施　耀　子

＜経　　過＞

私共は*PMD*症患児の合併症中、上位をしめる上気道感染症の予防をテーマとして取り組んできた。前年度は上気道感染症が気象条件や外泊、面会、リクリエーション等との関連性の有無を調査検討し、その結果これといった特異な関連性は見出せ得なかった。それにもまして上気道感染が誘因となり重篤な呼吸不全の状態へと移行するのは肺機能の低下が大きな要因となっているものと思われる。

ちなみに比較的状態の良いD型男児の肺治量の経過を追ってみた。右図に示す如く身長体重は増加しているが肺活量は暫次減少している。この低肺機能への移行は胸廓筋の衰退、上肢挙上不能、変形等に起因するものであり低肺機能への移行防止がひいては上気道感染予防につながるものと考えられる。呼吸機能訓練の必要性を痛感し毎日の多忙な看護業務の中で看護婦の手で出来、しかも継続性のあるものをと今回の研究の課題とした。

筋ジストロフィーD型♂年令11才 障害度4度				
経過月日	身長cm	体重kg	肺活量cc	予測値cc
50年9月	128.0	23.2	1200	3200
51年2月	130.5	25.4	1100	3300
51年6月	132.5	25.4	900	3380

＜研究目的＞

1. 胸廓筋及び上肢挙上筋の衰退、変形等に起因する低肺機能予防。
2. 現在の肺活量維持。

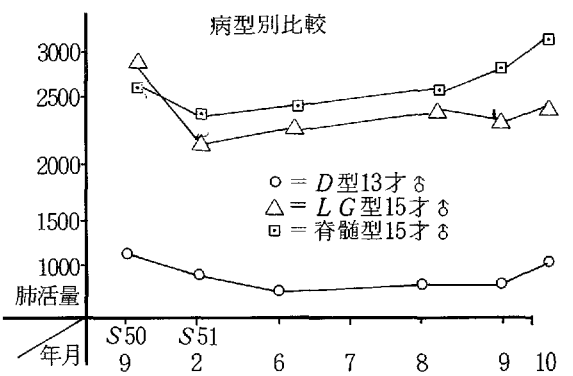
対　策　　呼吸筋の鍛練、深呼吸の指導

方　法　　1. 日に1～2回主として上肢挙上を伴う深呼吸を3～5回行う。
　　2. 上肢挙上時吸気、下降時呼気を介助により行う。
　　3. チエックカードにより実施のチエックを行い実施の確実を計る。
　　4. 肺活量の推移をみる。

＜実施結果＞

51年6月より徐々に深呼吸を手がけていたが8月より本格的に取り組み、次の様な結果を得た。

1. 右図は障害度4度の型別患児3例の肺活量の推移をみたものである。
D型○、LG型△、脊髄型⊡を示す。縦軸ににに肺活量、横軸に経過年月をとった。深呼吸開始した8月より肺活量の上昇がみられた。
2. 全患児の6月から10月迄の肺活量においても10月の優位が認められる。（図省略）



＜結　　論＞

以上の事により肺活量の現状維持を目的として開始した深呼吸丈、という簡単なものではあったが、開始前の予測を越えた好結果を得、又子供達が「深呼吸をすると気持が良い」と心待ちにし肺活量の測定を楽しみにしている姿を見るにつけ呼吸器機能訓練の必要性を痛感し今後も日課として継続していきたいと思う。上気道感染症の予防対策の一つとして今回は低肺機能への移行防止と取り組んだが、患児の抵抗力の増強、予備能力の増強こそが合併症の重要なポイントであり今後も努力していきたい。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

＜経過＞

私共は PMD 症患児の合併症中、上位をしめる上気道感染症の予防をテーマとして取り組んできた。前年度は上気道感染症が気象条件や外泊、面会、リクリエーション等との関連性の有無を調査検討し、その結果これといった特異な関連性は見出せ得なかった。それにもまして上気道感染が誘因となり重篤な呼吸不全の状態へと移行するのは肺機能の低下が大きな要因となっているものと思われる。